

西脇順三郎・浅野晃・神保光太郎 / 監修 青春の詩集 ⑨



# 佐藤春夫詩集

西脇順三郎編

白 鳳 社

西脇順三郎・浅野晃・神保光太郎／監修

青春の詩集 ⑨

佐藤春夫詩集

© 1965

昭和40年9月1日 第1刷発行

昭和46年2月27日 第5刷発行

¥400.

著作者 佐藤春夫

編者 西脇順三郎

発行者 高橋謙

発行所 株式会社 白凰社

東京都千代田区神田神保町 1-20

振替口座番号・東京92241番

電話・東京291-8365番

落丁・乱丁本はお取り替えます。 三協美術印刷・和田製本

0392-1109-6906

佐藤春夫詩集

西脇順三郎編



# 佐藤春夫詩集

---

西脇順三郎編



西脇順三郎・浅野晃・神保光太郎／監修  
青春の詩集 ⑨

白鳳社



目次

初期習作拾遺篇

また或るとき人に与へて

四

愚者の死

海辺の恋

四

病

断章

六

煙草

琴うた

六

犬吠岬旅情のうた

後の日に

七

友の海外にゆくを送りて

こころ通はざる日に

六

夜毎わが心のうたふ歌

なみだ

六

殉情詩集

感傷肖像

三

感傷風景

三

ためいき

三

少年の日

六

水辺月夜の歌  
或るとき人に与へて

二つの小唄

六

三

三

三

七

六

五

四

三

三

二

昼の月

三

うつろなる五月

三

わが溜息

三

心を人に与へ得て

六

メフィストフェレス登場

四

堀口大学に与ふ

六

夜深くして歌へるわが歎きの歌

四

海の若者

六

我が一九二二年

四

車塵集

六

秋刀魚の歌

四

ただ若き日を惜しめ

七

秋衣篇

五

春ぞなかなか悲しき

七

別離

五

音に啼く鳥

七

佐藤春夫詩集

五

春のをとめ

七

夕づつを見て

六

むつごと

七

秋の夜

六

水彩風景

七

淡月梨花の歌

三

川ぞひの欄によりて

七

うぐひす

三

水かがみ

七

しぐれに寄する抒情

四

はつ秋

七

遠き花火

四

秋の別れ

七

秋ふかくして

七



魔女

現代のダンテ

今ロオレイは

墓畔の恋

わが秋の歌

歎息

「真実」の狩人

魔女

晩秋悲風

カリグラム

われら詩人

私立探偵社報告書鈔録

胸算用

恋の決算

さめぎは

四行詩

二

三

三

四

五

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

女を論ず

恋の墓碑銘

閑談半日

酒、歌、煙草、また女

望郷五月歌

小園歌

小園歌

佐久の草笛

胡桃

村は晩春

首夏

くわくこう

路傍の花

柿もみぢ

三

六

五

六

六

一〇三

一〇四

一〇九

一一〇

一一〇

一一一

一一二

一一三

一一三

秋ばれ	二三
醉生夢死	二四
秋の小虫	二五
秋夕独語	二五
茶ばなし	二六
聽雪	二六
釣瓶拾ふ者に	二七
野路の朝に	二八
群山春意	二八
早春風景	二九
迎春花	二九
山の気候	三〇
春のおとづれ	三〇
好日	三一
ゆく春	三三
山中曆日	三三

玉笛譜	三三
遠方の愛人をしをびて	三四
君去にしより	三五
辺境の歌	三六
采蓮曲	三七
白楽天に答ふ	三六
水辺雪景	三九
東の人	三〇
まゆみ抄	三三
戸隠	三四
姥捨	三五
木曾の秋	四〇
抒情新集	四五
老残歌	四六

春寒消息 並に序

一四

新年来る

一七五

みやまをとめ

一四

東京賦

一七

春の日のうた

一四

ばんばん歌

一七

佐久の百合

一五

陽春狂想曲

一八二

秋思

一五

長男歩む

一五

詩人の生涯 (神保光太郎)

一八五

東京悲歌

一五

鑑賞ノート (西垣 脩)

一八

神無月

一五

わが詩は

一五

索引

二〇

未刊行詩集

一六

マロニエ花咲きぬ

一六

奥入瀬谿谷の賦 併序

一六

新らしき年の始めに

一六

還曆歌

一七

南島新春譜

一七

故郷のみかん

一七

一、本集の本文については、次の方針に従って編集した。

(1) 当用字体を有する漢字は、当用字体を使用した。

(2) かなづかいは原詩のままとした。したがって、ルビ（振りがな）は旧かなづかによった。

(3) ルビは、底本に振つてあるもの以外は、編者の責任において付した。

一、詩句については、創元社版『定本佐藤春夫全詩集』（昭和二十七年刊）を底本としたが、その他の版も適宜参考にして校訂した。

初期習作拾遺篇

## 愚者の死

千九百十一年一月二十三日  
大石誠之助は殺されたり。

げに厳肅なる多数者の規約を  
裏切る者は殺さるべきかな。

死を賭して遊戯を思ひ、

民俗の歴史を知らず、

日本人ならざる者

愚なる者は殺されたり。

「偽より出でし眞実なり」と

紋首台上の一語その愚を極む。

われの郷里は紀州新宮。

渠の郷里もわれの町。

聞く、渠が郷里にして、わが郷里なる

紀州新宮の町は恐懼せりと。

うべさかしかる商人の町は歎かん、

——町民は慎めよ。

教師らは国の歴史を更にまた説けよ。

## 病

うまれし国を恥づること。

古びし恋をなげくこと。

否定をいたくこのむこと。

あまりにわれを知れること。

盃さかづきとれば酔まひさめの

悲しさをまづ思ふこと。

## 煙 草

父ちちの教をしへをやぶりつつ

父ちちの金かねもてわが吹かす煙草たばこ、

国くにの掟おきてをよそにして

国くにの都みやこにわが吹かす煙草、

おもしろやそのけむり、

むらさきに輪りんとなりて

春はるの夜よのさびしきわれをとりめぐる。



犬吠岬旅情のうた  
いぬほらさき

ここに来て

をみなにならひ

名も知らぬ草花をつむ。

みづからの影踏むわれは

仰がねば

燈台の高きを知らず。

波のうねうね

ふる里のそれには如かず。

ただ思ふ

荒磯ありそに生ひて松のいろ

錆びて黝くろきを。

わがこころ